



東京家政学院大学大学院

人間生活学研究科

男女共学

家政学専攻 取得可能な学位：修士（家政学）

栄養学専攻 取得可能な学位：修士（栄養学）

Knowledge
Virtue
Art

100th
Anniversary



Tokyo Kasei Gakuin University

Graduate School of Human Life Sciences

2023



Family and Consumer Sciences

Nutrition Sciences



中学校、高等学校、大学、大学院まで——。 東京家政学院の根幹、 創立者大江スミの掲げたKVA精神

実践的な知識人としての使命を果たし得るとともに、
徳性および感性豊かな女性を育成する教育理念は、
東京家政学院中学校、東京家政学院高等学校、東京家政学院大学、東京家政学院大学大学院に
共通する建学の精神です。

KVA 精神 / 創立者



K
Knowledge
の啓発

知識を高める

V
Virtue
の涵養

徳性(人間性)
を養う

A
Art
の錬磨

技術を磨く



東京家政学院 創立者
大江スミ

家政学の確立と女性の自立をめざして 東京家政学院を創立

この頭文字をとって、【KVA 精神】と呼んでいます。
知識(Knowledge)と技術(Art)を高めるだけでなく、
真ん中にある、もっとも大切な徳性(Virtue)を養う。
そんな建学の精神を根幹に、創立者、大江スミが掲げた
「人々のしあわせにつながる家政学」は、
本学に脈々と受け継がれています。

4年間の英国留学を経て、家政学が社会の基礎単位である家庭
生活の質を高め、社会生活それ自体を豊かにする学問であると
確信。高度な教養教育と、実験・実習を重視した独自の家政学を
実現するため、東京家政学院(現・東京家政学院大学)を創立し、
「家政学の殿堂」として全国にその名をとどろかせるようになりました。

Knowledge
Virtue
Art

100th
Anniversary

東京家政学院は、 2023年に創立100周年を迎えます。

大江スミが本学院を設立して100年。
時代が変わってもKVA精神をはじめとする伝統は脈々と受け継がれています。
人々の生活の質を高めるために、持続可能な社会を実現するために、
東京家政学院は、つぎの100年もさらに飛躍します。

学長からの言葉



東京家政学院大学 学長
鷹野 景子

生活に関わる事象を
学際的視点で探求
知識の深化と切磋琢磨の場を提供

新型コロナウイルス感染症の世界的拡大により、人々の生活は一変しました。一人ひとりが、それぞれの人生や日々の生活における価値観を自らに問い、グローバル社会の一員として、何を大切に生きていくべきかを改めて考えるようになりました。そして今、身近な生活の課題を解決するために、人間の生活を科学的に探求することが求められています。本学大学院「人間生活学研究科」では、総合科学としての人間生活学に興味のある学生に広く門戸を開いています。高い専門的知識を教授することに加えて、その道の専門家たちからの知的刺激や学生同士の切磋琢磨により、高いレベルの課題解決能力やリーダーシップを身につけることができます。大学院での学びは、将来の選択肢を格段に広げます。深い知識や多様な経験で培った力を活かした修了生の活躍を確信しています。

研究科長からの言葉



東京家政学院大学大学院 人間生活学研究科長
田中 弘之 教授

持続可能な社会を実現するための
さまざまな課題を見いだし
その解決を図る意欲的な教育研究

「人間生活学」は、人間の生活に関わる事象を科学的に研究する学際的な学問です。私たちの生活は便利で豊かになった一方で、地球温暖化、廃棄物の発生と循環型社会の形成、化学物質の環境リスク、大気と水環境の保全の問題などは、私たちの日常生活や事業活動が密接に関係しています。このような環境問題に対処するためには、一人ひとりが人間生活と環境との関わりについて認識と理解を深め、環境教育やESD（持続可能なための教育）といった、問題の解決につながる新たな価値観や行動などの変容をもたらす、持続可能な社会を実現していくことをめざして行う学習・教育活動が必要です。人間生活学研究科は、学士課程（現代生活学部、人間栄養学部）の教育を発展させた2専攻により、現代社会が抱えるさまざまな課題を達成に導く教育研究に取り組んでいます。少人数教育の中、院生は教員や院生同士の活発なディスカッションを通して、高度な専門性が求められる職業を担うための学識、能力および倫理観を培い、社会に貢献する人材を育成します。



History



鷹野 景子
東京家政学院大学 学長

人間の生活に関わる事象を科学的に研究する「人間生活学研究科」での学びが、なぜ、いま必要とされるのか。学びを通して、何が得られるのか。そして世の中に、いかに貢献できるのか。学長、研究科長、教授の対談で、その魅力をお伝えします。



田中 弘之 教授
東京家政学院大学大学院
人間生活学研究科長

社会が求める「知のプロフェッショナル」 人間生活学研究科が果たす役割



上村 協子 教授
家政学専攻主任



海野 知紀 教授
栄養学専攻主任



井上 清美 准教授

現代社会の課題を解決する「人間生活学」とは

人間生活学がめざすのは、
持続可能な社会の実現をめざして行う
教育・研究活動

田中：本学の研究科の役割について話を進めたいと思います。研究科の名称を「人間生活学研究科」としているのは、人間生活学を、人間の生活に関わる事象を科学的に研究する学際的な学問として位置付けた、この研究科を設立した時からの考えです。人間がよりよい生活を送るために、さまざまな活動をしてきた結果、現代社会では種々問題が生じてきます。私たちの生活をより便利で豊かにするという限定的な価値観によって、地球温暖化、生物多様性の喪失などの問題が生じています。私たちの良質な日常生活や、経済成長という事業活動は、社会的諸問題とも密接に関係していると考えます。こういった課題を研究する取り組みというのは、人間の生活を科学する家政学院において、まさに両専攻の共通

テーマではないかと思います。

鷹野：そうですね。大学院では一人ひとりが人間生活と環境との関わりについて認識と理解を深める教育研究活動が必要だと考えます。それは環境教育やSDGs、課題の解決につながる新たな価値観や行動などの変容をもたらし、持続可能な社会を実現することにもつながります。また、本学設立者の大江スミ先生のお考えは、国際社会をリードする女性を育成したいというものでした。男女共学である本学大学院では、男女を問わず、ともに切磋琢磨し、徳性を養って人間として成長し、地域・国のレベルを超えて互いに影響を与え合うような、国際社会をリードする方を育てたいという思いでいます。

田中：問題の解決につながる新たな価値観や行動などの変容を考えることやグローバルな人材育成には、深い学びが必要ですね。

鷹野：学部ではその分野の基礎的なことを学びますが、大学院の価値は、社会的な事柄や専

門的分野にいたる研究課題を見いだして、その研究分野の課題を深く学ぶことで、さらに院生自身の成長も促すということにあると思います。大学院の修了後は、学部よりさらに深みと幅の広さを持って、活躍されている方が多いと思います。

社会的意義を果たすための研究とは、
まず生活者の視点に立つことから

海野：SDGsは、基本的に人間そのものに視点を置き、人間の生活の価値は普遍的であるとの考えに基づいて目標設定されています。その意味では、人間生活学研究科が対象とする研究も、やはり人間が真ん中において、人間と人間、人間と環境、人間と社会といった相互の現象を、SDGsという開発目標と絡めて研究していくことが考えられますので、まさしく人間を中心とした研究がテーマと理解しています。

上村：学部でも、生活の質を重視する生活者

の視点に立って、人間生活における私たちの日常的な行為、毎日の暮らしと、それを成り立たせる生活の諸条件の相互作用について研究して、持続可能な生活の創造に貢献する実践的総合科学を研究するという方向性を掲げて

います。ただ、学部で授業では理念より活動や実態に主が置かれますが、大学院では日常を積み重ねて考え、背景の理念や理論を深め、専門性を高めます。本学は、「生活者の視点から」研究することに特色があります。一人ひとり

のウェルビーイングを大事に行動変容し、国や経済・社会や大きな領域に影響を与える核となる社会的意義ある学問として、いま、持続可能な社会の創造を目標にしています。

「人間生活学研究科」の成り立ちと、2つの専攻

生活と文化の融合から生まれた研究科

田中：本学の研究科の成り立ちについて、少しお話ししたいと思います。2専攻に分けた際に研究科長をしておられた海野先生いかがでしょうか。

海野：1995年に人間生活学研究科が設置された時には、生活文化専攻という一つの専攻でスタートしました。当時は人文学部と家政学部という2つの学部構成でしたので、それを生活文化という視点から研究していこうということでスタートしました。時代の流れの中で学部が再編され、新たに人間栄養学部が設置されました。それに合わせる形で大学院についても家政学専攻と栄養学専攻の2専攻に改組しています。成り立ちの経緯で特筆すべきこととしては、生活と文化を融合させた研究というのが当時はほとんどなかったというところで、家政学院ならではのユニークな研究が行われたのではないかと考えていま

す。

田中：学部在学中には、高校までに学んできたような知識を発展させて、社会活動につなげていくという目標があります。例えば人間栄養学科では資格取得、または他学科を含めでは、社会に適切な対応をするということから、いろいろな側面においてとらえることができる知識や体験を得るという学びがあります。大学院の栄養学専攻では健康の保持増進、疾病予防とその重症化予防などを栄養学的な見地から教育・研究して、ライフステージに応じた活力ある人生を送るための必要な課題に取り組むということ、また家政学専攻においては人間生活に関わる総合的かつ専門的知識、または技術を教育研究する中で現代社会が直面するいろいろな課題に対して実践的に貢献する、というふうに設立の中で述べています。こういったところから、両者とも社会に有意な人材を養成することを目的としているということに、この2つの専攻設置の経緯が

あると思います。

上村：歴史的に本学は、イギリスから学んできた家事・家政といったケアを日本の生活の質をよくするために科学的にバージョンアップし、科学としての日本の家政学としてアレンジしてきた大学です。また、それを考えるのは科学者だけではなくて、私たち生活していく人間だという当事者性を、創立者の大江先生は示しました。KVAのV、徳性を持った人間がちゃんと知識や技術を使いこなしていけないと、人間の生活の質の向上はないという、ある意味、生活思想的なものをど真ん中の総合家政として置いたところが東京家政学院の人間生活学研究科の特色かなと思います。

鷹野：「科学として」という点において、大学・大学院で展開する意義がありますね。そういった歴史をこの100年積み重ねているということの重みを改めて感じます。本学は今後、ますます生活者の視点に立った生活の科学を発展させていかなければいけませんね。

学部との学びの違い、本大学院で得られる能力

大学院には、実践者とその未来に 役立つための研究がある

田中：続いて、学部との学びの違いと大学院で得られる能力ということについてお話ししたいと思います。先にもお話ししましたが、問題の解決につながる新たな価値観や行動などが変容すること、持続可能な社会の実現をめざして行う学習・教育活動が必要だということが、大学院の私のイメージです。このことは、持続可能な社会を実現するためのさまざまな課題を見いだして、その達成を図る意欲的な教育・研究をしていくということになると思います。これらを、学部の時期も含めて段階的に学んでいく過程に、多種多様な方々とまず知り合うということが必要ではないかと

思います。それによって価値観を広げる、そして一つの結果にとらわれずに、二次的・三次的効果を生み出す知識と創造力を身につける。このことを基に、それらをほかの方々へも伝えて、主体的な行動ができるという能力を得ること、そして互いの影響力による反応する力を身につけることが大学院のめざしているところです。

鷹野：そうですね、価値観を広げるというのは本当に重要だと思います。大学生の段階でもいろいろな方と出会って、学びを深めたり広げたりしてほしいのですが、次の段階として、大学院でさらに多くの方々と出会い、交流することに大きな意義があると思います。国内のさまざまなバックグラウンドの方、海外から日本を訪問される方、海外在住の方、

そういった方々の多様な価値観を知ること、見方が変わります。現在、国際的な情勢を抜きにして、私たちは生きていけません。さまざまな価値観を知って、日本国内だけでなく、地球上のさまざまな所にいる人たちそれぞれが幸せを感じられるように、私たちは社会に貢献していかなければならないと思います。

上村：生活者の視点で行動変容していく時に、今まで、どちらかと言うと、家政学は内向きのイメージがあって、自分たちの暮らしを守るとか、社会と言っても比較的狭い価値観で共生し協働し生活選択をしてきたと見られがちでした。今後は鷹野学長がおっしゃるように、国際的な状況を見ながら、多様な立場や文化で暮らす人の価値観を理解しながら、自分の立ち位置を外に向けても発信していくという

ことも非常に重要だと思います。

志を外に向けて伝えていく、
人に影響を与えられる人になる
ということ



海野：学部と比べて、大学院では研究活動が主体になります。研究は「仮説を立てる」とよく言うんですけど、問いを立てることからスタートします。ただ、その仮説を立てるた

めには世の中がどういう状況なのか、あるいはもう少し具体的に言うと先行研究にはどういうものがあるか、そういったことをしっかり調べなければなりません。私の分野で言うと先行研究を調査し、仮説を立て、仮説を実験に基づいて検証していきます。そして、仮説が正しかったのかを考察していきます。研究成果は、世の中の多様な価値観を持った方に説明することが求められます。その意味で、研究活動を通してコミュニケーション能力も培っていけるというのが大学院のよさだと思います。

井上：指導している院生を通して大学院教育で実感しているのは、一人ひとりが人間生活に対する認識と理解を深めて、深めるだけではなく、課題の解決に関わるような行動変容につなげるというところをどの専攻も非常に大事にしているということです。大学院生の日々の様子から、その点を先生方が強く意識して教育をされていることが伝わってきます。

す。またそれは、学部教育・大学院教育に共通する、家政学のよさでもあります。私が指導している学生は学部から大学院に進学しましたが、海野先生がおっしゃるように、学部では、卒業研究を通して研究とは何かというところから始まって、問いを立ててそれを考察していくという、本当に研究の初めての一步をやってみて、さらに深く知りたい、突き詰めて考えてみたいという思いが強くなって大学院に進学しました。

田中：突き詰めたいという気持ちは、時に周りにも影響を及ぼしますよね。先ほど創立者の大江先生の話が出ましたが、本学の建学の理念にある「KVA精神」に基づいて、学部の時期は物事を実践して体得していくとしたら、大学院での学びの中では、周りとともに高め合って、人に伝えていく、言わば、周りにより影響を与えるような人として成長できる人材を育成するのが大学院の使命かもしれませんね。

より高度な知識の修得につながる、教育・研究体制 本大学院での研究を、社会でどう活かしていくか

多様な世代がともに学び合う、
新しい大学院の姿

田中：学部と大学院のめざすべきところを達成するためには、より高度な知識の修得につながる教育・研究体制ということが必要になってきます。具体的なことについて話を広げていきたいと思います。本学の大学院は、よく担当教員の多さに注目されますが、それは一つのポイントだと考えています。例えば領域間の専門分野の共有を図って幅広い知識が得られる、またはゼミ形式などの研究、修士論文の作成時に個別的な対応が図れるという利

点に思われます。また、履修についても、ほかの大学や、他専攻における授業科目の履修を認めている*ところも本学の大学院の教育・研究体制の魅力ではないでしょうか。このあたりは、実際に院生指導をされている井上先生、どのようにお感じになりますか？

井上：今年度入学した院生を指導していて感じるのは、成長が著しいということです。いろいろな先生と対話をし、院生同士でディスカッションを重ねることで、どの授業も少人数のゼミ形式ですので、本当に短い期間で成長してくれています。多くの学術書や論文を読むようになって、ディスカッションで出てくる言葉や文章が著しく向上しました。

私が指導している院生は、家庭科の非常勤の教員をやりながら大学院で研究を進めています。研究テーマは「家族とは何か」、家族の多様性について考えたいということで院に進学しましたが、家庭科の中で家族をどのように教えていったらいいのかということを、自分が大学院で学んだことを取り入れながら、新しい授業内容にチャレンジしています。それがまた現場の先生方にも受け入れられ、教育の

現場や社会に貢献できているという実感も持ち始めているようです。

上村：いま、とても大事なお話をしていたと思います。最近、総合知という言葉が日本のいろんなところで言われていますね。課題解決のために、専門分化された知識を総合する。そちらの専門のことは分からないで止めない。ディスカッションをして、私の立場としてはここがよく理解できない、自分がどうしたらいいのか、アドバイスを欲しいとか、違う領域の方とディスカッションしながら専門を深めていく持続可能な社会には、総合知が大事で、本学はそれを大切にしております。いろんな先生が全然違う話をされて、でも、どこかで共通点を探そうと先生方がしていらっしゃる。総合的な科学を確立させるためにはこういうスタンスが必要なんだと学んでいくところが特色です。多彩な領域の先生方がいらっしゃるところで、少人数で学べるのはぜひいたく環境だと、院生からもよく聞きます。

井上：多彩な先生方ということに加え、今年私が担当している生活経営学特論では、科目



等履修*の学生さんが来てくださりまして、50代から70代までの、さまざまな世代の方が履修されました。家庭科の教員を長く、もう30年以上やっていらっしゃる方もいれば、家政学の研究者をされている方もいましたし、本学の卒業生で、3人お子さんを育て上げて、今後の生きがいを考えるために学びたいということで来てくださった方もいらっしゃいました。「学び直し」と言いますけれども、学び直しというより学びを深めたい、新しく学びたいという意欲が皆さん非常に高く、とにかく学生になるのが嬉しいとおっしゃっていましたし、よい刺激を私自身ももらいました。これからの家政学や家庭科教育の発展を考えると、男性も女性もともに学ぶ、ともに学びを



深めていくということが欠かせないと思いますし、またジェンダーに拘わらず、多様な世代の人が家政学と一緒に学ぶということが非常に大事だと思います。

上村：誰でも何歳になっても自分の生きる可能性を広げるために、社会に貢献するためには、1人で抱え込んでしまってはできない。それを学ぶために、本学の人間生活学研究科というのは向いた構成になっていると思います。

海野：大学院で学ぶ目的というのは、専門知識をつけるとか、スキルを身につけるとか、そういうことももちろんではありますが、やはり理論的な考え方とか、問いを立てて、最終的な課題解決に向けてどのような取り組みをしたらいいか、ということまでの一連の流れを学ぶ機会、自分なりの答えを出していく機会でもあるかなと思っています。スキルだけではなく、知識だけではなく、そういった考え方が社会において活用できると思います。社会に出る前にこういうスキルを身につけて入学されてくる方もいますし、逆に一度、社会に出て、社会における問題点を抱えた中で大学院に入学してきて、教員とともに研究活動を進めていく場合もあります。つまり、大学



院から社会へというのと、社会から大学院へという、その両方の矢印がある*ということですね。学部で卒業した方が社会に出て、大学院に戻ってくる、そして大学院での研究を社会に活かすという、KVAの精神が学部・大学院・社会へと受け継がれていく、本学の学びが社会と連続できる環境が整ってくるといいなと思っています。

田中：社会に出るという目的を持って研究している方、社会に出て課題などを見いだして大学院に戻ってくる方、多様な学生さんの意志に是非応えていきたいと思いますね。

学部卒から次の学びにおいては、経済的自立を得て、そして学び始める形も、新しい大学院生の在り方かなとも思いました。

本大学院への入学をめざす皆さまへのメッセージ

好奇心こそが可能性の広がりにつながる

田中：最後に、本学大学院をめざす方へのメッセージを両専攻主任からいただけますでしょうか。

上村：家政学専攻では身近な生活への好奇心・問題意識が教育者になるにも研究者になるにも重要です。食文化に興味を持って入学した院生がいました。彼女は食と家庭経済を合わせたような、日本と韓国における食生活の変化と特徴、統計調査研究をして、食文化と食政策をつなぐユニークな修論を本学で書いた後、さらに学びを深めたいと、お茶の水女子大学の大学院、そして、オランダのライデン大学へと進み、博士号を取得しました。現在は、韓国の大学で招聘教授、本学で客員教授としても活躍しています。日常生活や経験を起点にする学びというのは、人との出会いを呼び、本当に学んだ先にいろいろな世界、広がりがある

ということ、好奇心を持って本当に楽しいと思ったことはどんどん広がっていったと学部の授業で一生懸命話してくれています。生活に対する好奇心や問題意識を原点に研究する個人の人生にはいろいろな可能性があるということをメッセージとしてお伝えしたいと思います。

海野：栄養学専攻からのメッセージとしては、やはり大学院は研究するということが主な役割になりますので、こういうことを学びたいな、研究したいなという好奇心を持つことを大事にしてほしいと思っています。栄養学専攻は、栄養学という学問を、単に食べ物ということだけではなく、健康科学とか、あるいは公衆栄養学を中心とした実践栄養学とか、もちろん臨床栄養学とか、こういったいくつかの分野にカテゴライズした科目構成をとっていますので、そういった科目を履修する中で広い知識、そして深い知識を学べる体制ができています。しかも研究指導も1人の学生に対

して複数名で指導していく体制になっています。4年生からの進学、それから卒業した方がここに戻ってきていただけるような、そういう多様なニーズに応える大学院をめざしています。

田中：本日は多彩な議論ができてよかったと思います。今後も大学院生とともに発展的に取り組んで参りましょう。



特別企画

修了生が語る“就職 × 大学院での学び”

大学院での学びを活かし飛躍する修了生に、体験談を語ってもらいました。

管理栄養士として
勤務してから再び学問の道へ
自分の経験を後輩に
還元していきたい

PROFILE

西村 美帆子さん

人間生活学研究科 生活文化専攻 平成31年3月修了
(東京家政学院大学 現代生活学部 健康栄養学科卒業)

職歴 日清医療食品株式会社(管理栄養士)、
独立行政法人 国立病院機構 下志津病院(非常勤栄養士)を経て
大学院進学、修了。
現在は東京家政学院大学 人間栄養学部 助手

西村さんの歩んでいる道程



大学卒業後、現場で調理技術や献立作成の力を身につけたいと思い、給食受託会社に就職しました。調理や献立作成の業務ができるようになるにつれて、次第に栄養管理業務に携わりたいという気持ちが強くなり病院に転職をしました。病院では、社会人になってからの勉強不足を痛感しました。臨床分野は常に最新の知識が求められます。適切な栄養食事指導や栄養管理を行うには現状では力不足だと思い、勉強をし直そうと大学院進学を決意しました。また先輩の管理栄養士から、病院管理栄養士も学会発表や論文発表を求められると聞いたことも後押しとなりました。

大学院では自分の専攻分野に関する専門知識や技能を身につけ、研究のための基礎を修得します。また、管理栄養士としてのスキルアップやキャリアアップに加えて、知識だけでなく他者に対し多面的かつ広い視野の「ものの見方」を学ぶことができます。私は小児肥満を対象に早食いについての研究を行いました。データ解析や論文作成は難しく進まない時期もありましたが、学会発表を終えたときや修士論文が完成したときは、言葉にできないぐらいの達成感を味わいました。

本学に就職したのは、管理栄養士をめざした大学での学び、社会現場での学び、そして大学院での専門的な学び、これらの経験を後輩に還元したいと思ったからです。今はおもに3年生の授業や臨地実習の補助をしています。3年生は授業数が多くハードな学年のため、学生の著しい成長を見ることができて嬉しいです。現在は、大学院博士課程でも学んでいます。両立しながらの業務は大変な面もありますが、研究力を向上させ、教員としてもさらに成長し母校に貢献すべく頑張っています。私は大学院進学によって管理栄養士としての道が広がりました。管理栄養士は生涯学び続ける必要がある職業であり、豊かな人間性が求められます。ぜひKVA精神を学ぶことができる本学での大学院進学を視野に入れてみてください。

「学生」と「先生」の立場を
経験し、広い視野で
物事を考えられるように



家政学専攻

学部卒業後に進学

PROFILE

財前 ナオ さん

人間生活学研究科 家政学専攻 2年
(東京家政学院大学 現代生活学部 現代家政学科卒業)

勤務先

学校法人東京家政学院 東京家政学院中学校・高等学校
非常勤講師

大学卒業後、すぐに教壇に立つのが不安だったので「大学院で学びながら、非常勤講師としてキャリアを積める」のが魅力的だったこと、以前から興味があったフィンランドの消費者教育をもっと研究してみたいという思いから、大学院進学を決意しました。

今は「教わる側」として大学院で受けたアドバイスを、「教える側」として授業で実践できるよう取り組んでいます。大学と違うのは、「課題を見つける、調査する、伝える、ディスカッションする」という学び方。少人数だからこそ、自分の研究領域以外の意見を聞けるチャンスも多く、多様な視点から物事を考える力がついたと感じています。将来は、「生活は個人の営みだけでなく、共生し合い成り立っていること」を伝えられる家庭科教員になりたいです。

栄養学専攻

就業しながら学ぶ

PROFILE

藤田 愛 さん

人間生活学研究科 栄養学専攻 1年
(東京家政学院大学 現代生活学部 健康栄養学科卒業)

勤務先

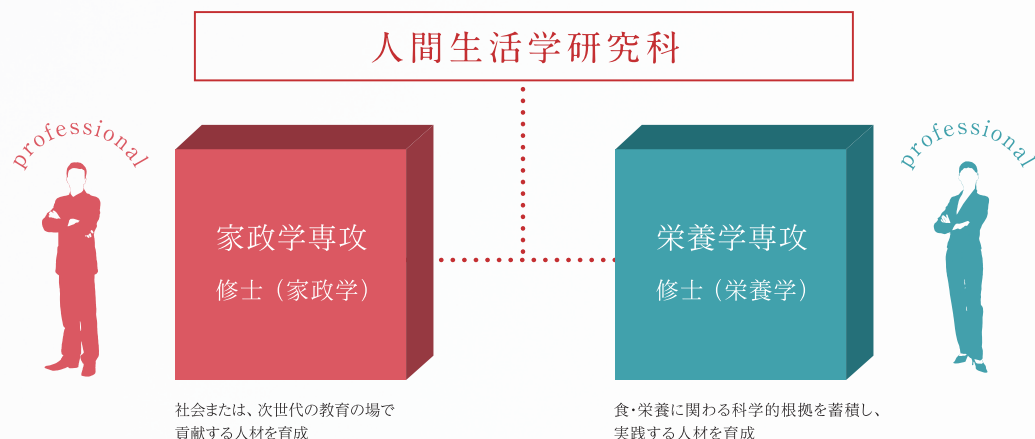
公益社団法人 東京都教職員互助会
三楽病院 栄養科

大学卒業後は、病院栄養士としての業務に加え、医療系の学会に入会し、専門資格を取得しました。その中で、学部生の頃には感じなかった疑問や発見が生まれ、それをもっと深く追求したいと思い、大学院進学を決意しました。今は、修士論文の完成に向け、より精度の高い研究を行うための知識や技術、論文を深く読み解く力を修得中です。分野の異なる院生との交流を通して、自分の研究を多角的に見つめられるのも勉強になっています。将来は、大学院での学びを現場で生かし、自ら栄養学について発信する立場になりたいです。院への進学を決心するタイミングは人それぞれですが、専門性を高めたいと感じたときがその人にとっての最善のタイミングだと思います。まずは研究室の教授に相談してみてください。一緒に頑張りましょう。

現場に出てみて改めて感じた、
高い専門性の大切さと
学びへの意欲



2つの専攻で育成する、 社会が求める「知のプロフェッショナル」



人間生活学研究科は、質の高い生活を創造するための理論および実践を研究する「家政学専攻」と、人々の健康の維持増進に向けた戦略的な方法論を研究する「栄養学専攻」があり、学士課程教育との連続性を意識しながら、人間生活に関わる専門的知識や技術を修得することができる、家政学・栄養学の中核的な教育研究拠点として2020年度に2つの専攻を開設しました。

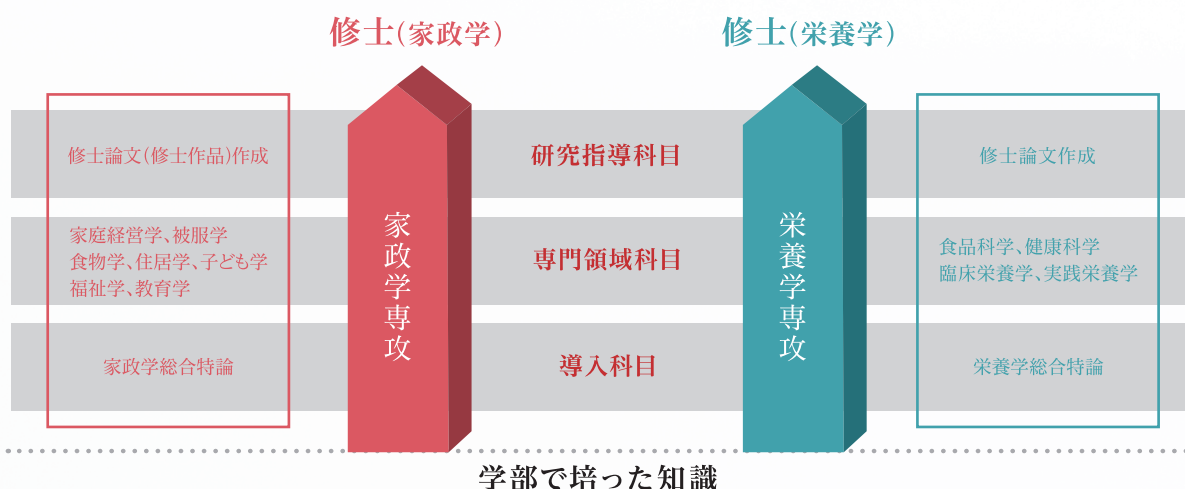
社会・環境の変化が著しい時代において、持続可能な社会の実現や、生活の質をより向上させていくためには、広い視野に立って精深な学識を有する「知のプロフェッショナル」が必要です。現代社会が直面する個人、家族、地域および地球規模の諸問題に対しても実践的に貢献できる有為な人材を養成します。

社会を牽引する教員による 教育・研究体制

本大学院の講義は、各分野をリードしている教員によって少人数制のゼミ形式で行われます。研究指導は、指導教員（主指導教員、副指導教員）のもと、設定した研究課題に基づいて、修士論文の提出に向けて進めていきます。

※家政学専攻では、特定の課題の研究成果（修士作品）についての審査を受けることもできます。

2つの専攻分野の垣根を超えた横断的な履修体制



人間生活学研究科を構成する家政学専攻と栄養学専攻において、専攻を横断した普遍的なスキルやリテラシーなどを身につけるという観点から、相互の授業科目を履修することができる仕組みを整えています。履修した他専攻の授業科目の単位は、6単位を超えない範囲で在籍している専攻において修得したものとみなすことができます。

人間生活学研究科 3つのポリシー

アドミッション・ポリシー

知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材、あるいは高度な専門的知識・能力を持つ専門職業人を目指し、これまでに培った学識や能力を基盤に、学術の理論および応用の深奥を究めようとする好奇心の強い人、また、多様な経歴や価値観を持った人を幅広く求めている。

-
- 【 知識・技能 】 専攻分野を広く学び、有為な人材として社会で活躍するために必要な高度な知識・技能を身につけたい人。
- 【 思考・判断 】 人間生活に係る諸問題を発見し、学際的、実践的な研究を通じて、人間生活の本質的な価値を追究したい人。
- 【関心・意欲・態度】 人間社会の多様な営みに興味・関心を持ち、生活の質の向上と人類の福祉に貢献したい人。
- 【 表 現 】 他者を理解した上で、自らの見解を形成し、それを豊かに表現する能力を培いたい人。

カリキュラム・ポリシー

広い視野に立つ精深な学識を授け、専攻分野における研究能力またはこれに加えて高度な専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培い、そして豊かな人間性を追求し続ける素養を身につけるための教育・研究指導を行う。

-
- 専攻分野における基礎的素養の涵養を図るための「総合特論」を開設する。
 - 専攻分野における高度な専門知識を修得するための講義科目を開設する。
 - 専攻分野における諸課題に関し、解決に導く能力を養うため、「特別研究演習」を開設する。
 - 高い学術水準の学位論文の完成に向けて、指導教員（主指導教員および副指導教員）による個別の研究指導を受ける。
 - 公開の中間報告会や最終発表会におけるプレゼンテーションや討議を通じて、調整力や研究内容の質の向上を図る。

ディプロマ・ポリシー

研究科の定める年限において所定の単位を修得し、以下の学識・能力を身につけ、かつ修士論文または特定の課題についての研究成果の審査および最終試験に合格した者に学位を授与する。

-
- 【 知識・技能 】 専攻分野に関する高度な知識・技能を修得し、質の高い生活の創造に向けて、それらを総合的に活用することができる。
- 【 思考・判断 】 現代社会が直面する個人、家族、地域、さらには地球規模の諸課題を発見し、生活者の視点に立って、解決に必要な情報を収集・分析・整理することができる。
- 【関心・意欲・態度】 常に変化する人と環境との関係を理解しながら、次々に生起する諸課題の解決に向けて、主体性を持って学び続ける意欲を有している。
- 【 表 現 】 コミュニケーション能力およびプレゼンテーション能力を有し、思考・判断のプロセスや結果を他者と共有することができる。

人間生活学研究科 家政学専攻

Master's program in family and consumer sciences

家政学は、家族、地域、地球に生きる人について、経済原理のみではなく、生活者の側から見据える学問です。

家政学専攻は、「総合家政」の学びに「教育学」を融合させた教育研究を展開します。

現代生活に関する問題解決のための研究または家政学と教育学を複合した研究を行うために、家政学専攻の下に2つの履修モデルを用意しています。

教育研究領域のイメージ



総合家政 モデル

実践的総合科学としての家政学が有する固有の特性を理解する履修モデルです。

家政教育学 モデル

現代の中高等学校における家庭教育の意義を理解し、次世代の自律的な生活経営能力を指導するための履修モデルです。

授与学位

修士(家政学)

入学定員

6名

開講キャンパス

町田キャンパス
千代田三番町キャンパス

家政学専攻 3つのポリシー

アドミッション・ポリシー

これまでに培った家政学の学識や能力を基盤に、学術の理論および応用の深奥を究めようとする好奇心の強い人、また、多様な経歴や価値観を持った人を幅広く求めている。

【知識・技能】 家政学を構成する家庭経営、被服、食物、住居および子どもの領域に加え、福祉学、教育学を総合的に学び、高度で広範な知識・技能を身につけたい人。

【思考・判断】 生活者と社会の多様性を踏まえ、その普遍性と特殊性を理解し、客観的に分析・判断する力を身につけたい人。

【関心・意欲・態度】 生活上の問題に直面している人々に対し、問題点を論理的に解析し、解決法を持って質の高い生活の支援を行いたい人、次世代に向けて家庭科教育を通して良い生活を提言することに意欲がある人。

【表現】 他者を理解した上で、自らの見解を形成し、それを豊かに表現する能力を培いたい人。

カリキュラム・ポリシー

現代生活を対象とした課題研究または家政学と教育学を複合した研究を行うために、家政学専攻の下に2つの履修モデルとして編成し、系統的な学びのカリキュラムを編成する。

- 総合家政モデルでは、実践的総合科学としての家政学が有する固有の特性を理解し、生活現場と密接した学修によって、社会で求められる専門性と実践性を得る。
- 家政教育学モデルでは、現代の中高等学校における家庭教育の意義を理解し、次世代の自律的な生活経営能力を指導するための、教育理念、人間理解の方法、教育力を考究する。
- 家政学の学際性・実践性に触れることを目的として、「家政学総合特論」を開講する。
- 家政学の諸領域(家庭経営、被服、食物、住居、子ども)、福祉学、教育学に関する専門的知識・能力を修得することを目的として、特論科目群を開講する。
- 理論と実践の前進に寄与しうる高度な研究成果を生み出すことができるための、主指導教員を中心とした「家政学特別研究演習」を開講する。

ディプロマ・ポリシー

所定の単位を修得し、以下の学識・能力を身につけ、かつ修士論文または特定の課題についての研究成果の審査および最終試験に合格した者に修士(家政学)の学位を授与する。

【知識・技能】 家政学とそれに隣接する学問分野に関する広範囲な知識・技能を修得し、最適で持続可能な生活の創造に向けて、それらを総合的に活用することができる。

【思考・判断】 家庭、企業、学校、地域などで直面する諸課題を発見し、生活者の視点に立って、各種多様な情報を客観的かつ論理的に判断し、課題解決に向けて具体化できる。

【関心・意欲・態度】 主体性を持って学び続ける意欲を持ち、生活の質の向上と人類の福祉、次世代の教育への貢献を目指すことができる。

【表現】 コミュニケーション能力およびプレゼンテーション能力を有し、思考・判断のプロセスや結果を他者と共有することができる。

生活者による持続可能な社会の創造をミッションとした総合家政と家政教育学の2つのモデル

本専攻では生活者視点の研究と教育の2つのモデルで、その担い手となる専門家を育てます。「研究」軸では多様な専門分野の知識や技術を専門の垣根を越えて融合させ現代生活の質(well-being)を探究する総合家政モデル、「教育」軸では、地域や学校、多様な企業と連携し持続可能な社会の担い手を育てる家政教育学モデルを備えています。生活者の視点で地域や社会を見つめ、質の高い生活支援に携わりたい人を歓迎します。さらに他者を理解したうえで自らの見解を形成し、それを豊かに表現する力、発信力をつけて持続可能な生活の創造に貢献してほしいと考えています。

家政学専攻主任
上村 協子 教授

専任教員 研究指導教員

上村 協子 教授

専門分野 生活経済学、家庭経営学、生活設計論

担当科目 家政学総合特論、生活経営学特論、家政学特別研究演習

※2023年3月定年退職予定



研究テーマ 「現代生活学研究」 現代生活学とは、生活者の視点で持続可能な社会を創造する実践的総合科学です。食品ロス削減をめざし食(消費)と農(生産)をつなぐ女性農業者研究、持続可能な社会をつくる金融リテラシー研究など、生命の維持、生活の質を問う生活者の視点で、家政学が蓄積してきた学問研究の再構築をめざしています。

研究業績 「女性と持続可能な農山村地域社会ー日本女性農業者のエンパワメントー」(農村計画学会誌 37巻1号, 11-14頁, 2018) / 「天野正子『生活者論』と家政学ー家政学のエンパワメント・アプローチ」(家政学原論研究 52巻, 85-59頁, 2019) / 「生活者の金融リテラシー」(共編著, 朝倉書店, 2019) など

小野 方資 教授

専門分野 教育学、教育法学、教育史

担当科目 家政学総合特論、教育実践特論、家政学特別研究演習

研究テーマ 「生徒指導」と子どもの権利保障の課題についての研究、地域における新自由主義教育政策の受容と展開の研究、教育労働運動の歴史研究に取り組んでいます。

研究業績 「ゼロ・トレランスに基づく懲戒を目的とした『特別な指導』の法学的検討ー広島県教育委員会『生徒指導ハンドブック』の批判的検討を手掛かりに」(生活指導研究, No.38, 2021年9月, 75-84ページ) / 「17条(教育振興基本計画)2項(地方公共団体)」(日本教育法学会編コメントール教育基本法, 学陽書房, 2021年10月, 480-492ページ) / 「『犯罪機会論』に基づく生徒指導観の形成過程」(生活指導研究, No.37, 2020年11月, 59-69ページ) / 「運動方針の転換(1995年)に向けた日本教職員組合内における合意形成過程」(広田照幸編著『歴史としての日教組 下』名古屋大学出版会, 2020年2月, 252-289ページ) など

小池 孝子 教授

専門分野 住居計画学

担当科目 家政学総合特論、住環境計画特論、住環境設計特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「保育施設の施設環境に関する研究」「集合住宅の共有空間に関する研究」 少子高齢化、人口減少時代において、人々がより豊かな暮らしを送ることのできる環境づくりをめざして、住まいや地域、地域施設に関する研究を行っています。保育所、学童保育所といった子どもの施設の計画、集合住宅の外部共有空間の計画に関する研究のほか、空き家問題にも取り組んでいます。

研究業績 「スウェーデンにおける学童保育施設環境の特性」(こども環境学研究, Vol13 No3, 31-37頁, 2017) / 「共用スペースの活用による高層高密度団地の活性化に関する研究」(住宅総合研究財団研究論文集, No.34, 185-194頁, 2008) / 「保育環境のデザイン」(全国社会福祉協議会, 2014) など

白井 篤 教授

専門分野 建築材料学、コンクリート工学

担当科目 建築構法特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「持続可能な新しい建築物を作るための建築材料・構法の開発」「補修・補強による既存建築物の更なる長寿命化」 建築物を解体し、新しい建築物を建てるというスクラップ&ビルドの社会は終わり、今後は、持続可能な建築物を建てていくという考え方に移っています。そこで、耐久性に優れた建築材料や構法の開発と、既存の建築物を補修・改修することで長寿命化を図るという2つの視点で研究を行います。

研究業績 「建築用ポリマーセメントモルタルの防火性能およびその試験方法の提案」(日本建築学会構造系論文集, 第73巻, 第631号, 1449-1457頁, 2008) / 「改修工事の標準仕様書および指針類の整備の状況並びに考え方(あり方)」(日本建築学会研究協議会<主題解説>, 37-42頁, 2015) / 「建築材料 新テキスト」(彰国社, 2014) / JIS A 1171」(日本規格協会 2016) など

大橋 竜太 教授

専門分野 建築史、建築保存

担当科目 環境文化特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「歴史的建築・都市の保存・再生に関する研究」 大地震や大火後に、都市がどのように再生してきたかに関する歴史研究に取り組んでいます。また、諸外国の歴史的建造物の保存の実態について、特に防災的観点から制度や技術の調査・研究を行うとともに、小岩井農場(堺石市)、英国領事館(長崎市)、グラバー邸(長崎市)、高山社(藤岡市)など、国内の歴史的建造物の保存・再生の実践に携わっています。

研究業績 「ロンドン大火」(原書房, 2017) / 「英国の建築保存と都市再生」(鹿島出版会, 2007) / 「イングランド住宅史」(中央公論美術出版, 2005) / 「被災歴史的建造物の調査・復旧方法の対応マニュアル」(共著)(日本建築士会連合会, 2014) / 「歴史的建造物の様式と修復ー英国の事例を通して」(『建築の歴史・様式・社会』中央公論美術出版, 213-222頁) など

河田 敦子 教授

専門分野 教育史、ジェンダー史

担当科目 教育学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「近代公教育制度における権力構造や公共性の性質とその形成過程の国際比較(日本とフランスの比較)」[フランスの公教育大臣であったギゾーの公共性の思想がどのように日本に輸入されたか]「女性にとって『公』とは何かー幕末明治期の女性のライフヒストリー研究ー」に取り組んでいます。

研究業績 「近代日本地方教育行政制度の形成過程」(風間書房, 2011) / Atsuko KAWATA, Tokio KATO, Life history of Naito Masu, Revista Brasileira de Pesquisa (Auto) biográfica, v. 4, n. 12, p879-892, (2019) / 「教員の『公務員』性成立をめぐる歴史の国際比較」(東京家政学院大学, 2019) など

嶋田 芳男 教授

専門分野 地域福祉、福祉近現代史

担当科目 地域福祉活動特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「在宅福祉サービスの成立過程に関する研究」 わが国の在宅福祉サービスは、地域における地方自治体行政や民間施設などによって先駆的に実践され、その後、国により制度化されています。しかし、それら先駆的実践の成り立ちに関する詳細な分析・検討は、あまり見られない状況です。そこで、先駆的に実践された各種サービスの詳細な成立過程を分析・検討し、それらの全体像を明らかにする研究を主に行っています。

研究業績 「地域福祉の原理と方法(第3版)」(学文社, 2019) / 「特別養護老人ホームによる先駆的在宅福祉実践ー香東園の取り組みに焦点をあてー」(福祉文化研究, Vol.29, 53-63頁, 2020) など

新開 よしみ 教授

専門分野 保育学、児童学

担当科目 家政学総合特論、子ども学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「子どもの身体表現・劇的な表現を育む保育に関する研究」「保育者養成における保育内容『表現』の授業研究」など 子どもの「ふり」や「つもり」の世界、イメージ遊びやごっこ遊び、リズム遊び、「ノリ」遊び(ダンス的な表現の芽生え)など、身体表現遊びやノンバーバルコミュニケーションに関心があります。近年は保育者養成課程における領域「表現」の授業のあり方の研究に取り組んでいます。

研究業績 「保育者のためのキャリア形成論」(建邦社, 2015) / 「指導計画の書き方」(チャイルド社, 2016) / 「領域『表現』の専門的事項の授業において、教員の専門性はどのように生かされるのか」(日本保育者養成教育学会, 2020) / 「領域『表現』における『専門的事項』の教授内容検討Ⅱー7つのキーワードおよび教授・学習・成長パラダイムの視点からー」(乳幼児教育・保育者養成研究 第2号, 2022) など

研究指導教員

西口 守 教授

専門分野 高齢者福祉論、高齢者と spirituality、外国人介護福祉士育成・支援
担当科目 家政学総合特論、高齢者福祉特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「高齢者福祉、高齢者ソーシャルワーク全般(近年では、外国人介護人材の育成と支援、認知症の当事者視点でのナラティブアプローチ)」私は高齢者の現場で相談員として長く実践をしたこともあり、「現場」での研究に主眼を置いています。その中でもわが国の介護人材不足を契機に始まった外国人介護人材の育成支援のマネジメントについて研究を行っています。

研究業績 「高齢者福祉施設における生活相談員の「相談」の実際」(東京家政学院大学紀要第51号, 1-21 頁, 2011)／「外国人介護職員を受け入れるための制度と実践＝外国人介護人材を受け入れる意義とその方法＝」(東京都社会福祉協議会, 2017)／「認知症の養母の娘家族との同居の推移＝安定的生活の要因を「語り」から考える＝」(日本看護福祉学会, 2020) など

三澤 朱実 教授

専門分野 栄養指導、栄養教育、公衆栄養学
担当科目 家政学特別研究演習



研究テーマ 「食生活・食事内容が健康状態・体重に及ぼす影響の解明、ならびに栄養教育手法に関する研究」具体的には、朝食の欠食問題、野菜の摂取不足、若年女性の痩せ願望などの問題解決に向け、その実態を調査などで解明したうえで、栄養教育手法を開発し効果検証を行います。大学の近隣地域を活動母体とし、行政・学校などと連携して積極的な活動を展開しています。

研究業績 「若年女性に対する色彩を視点とした食育効果の検討」(査読付:日本食育学会誌, 第15巻第3号, 147-157 頁, 2021)「バス運転業務従事者における主食・主菜・副菜を組み合わせた食事の摂取状況と健康状態との関連性」(査読付:北陸公衆衛生学雑誌, 第42巻第1号, 17-26 頁, 2016)「食事バランスガイドを活用した栄養教育・食育実践マニュアル」(第一出版, 74-79 頁, 2018) など

山村 明子 教授

専門分野 西洋服飾史、服飾文化
担当科目 家政学総合特論、服飾文化特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「家庭生活における衣服と暮らしの変容」近年取り組んでいるのが、家庭の中の衣生活史という切り口です。服飾史の多くは社会生活において現れる現象を流行としてとらえてきました。しかし、家庭という閉じられた空間で何を着ているのか、と考えていくとまだ気づけていなかった、衣服と生活と家族との関わりにおいて問題提起ができると考えています。

研究業績 「大正期の家事労働と主婦の装い」(日本家政学会誌, 第70巻第10号, 629-642 頁, 2019)／「英国との比較における明治以降の主婦の装い」(日本家政学会誌, 第69巻第10号, 710-719 頁, 2018)／「第二次大戦以降のナイトウェアから考える主婦と家庭生活」(国際服飾学会誌, No.51, 22-31 頁, 2017)／「ヴィクトリア朝の女性たち－ファッションとレジャーの歴史－」(原書房, 2019) など

花田 朋美 准教授

専門分野 被服材料学、染色加工学、テキスタイル加工
担当科目 衣環境学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「混合溶媒法による収縮加工の研究」既存の合成繊維に新たな付加価値を付与することを目的として、繊維の良溶媒と貧溶媒を用いた混合溶媒法による収縮加工の研究を進めています。繊維収縮のメカニズムの考察と共に染色性への影響や物性変化について実験を行い、特に生分解性合成繊維においては生分解性への影響についても検討し、環境配慮型繊維の衣料用テキスタイルへの展開について提案しています。

研究業績 「ポリ乳酸繊維布の収縮加工における繊維径および良溶媒種の影響」(繊維製品消費科学 vol. 53, 826-834 頁, 2012)／「良／貧溶媒混合溶液で収縮加工したポリ乳酸繊維布の生分解性に及ぼす良溶媒種の影響」(繊維学会, 2018)／「良／貧溶媒混合溶液により収縮加工したポリ乳酸繊維布の染色量の変化」(繊維学会, 2019) など

原口 秀昭 教授

専門分野 建築設計
担当科目 住環境設計特論、住環境計画特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「近代建築の空間構成」20 世紀の建築家、ミース・ファンデル・ローエらの建築構成を分析し、近現代建築の空間構成の特質とその変遷を明らかにします。作家論に終わらせずに、近代建築全般の構成上の特質、近世以前の建築との構成上の比較を明示します。建築の実施設計では、現在社会問題になっている空き家再生に取り組み、耐震補強、断熱補強、リフォームをして再生しています。戸建ては、現在 12 棟運営中です。

研究業績 「ゼロからは始める RC 造施工入門」(彰国社, 2018, 他ゼロからシリーズ 15 冊)／「ルイス・カーンの空間構成 アクソメで読む 20 世紀の建築家たち」(彰国社, 1998<中国語版、台湾語版あり>)／「20 世紀の住宅 空間構成の比較分析」(鹿島出版会, 1994<英語版、中国語版あり>)／「中富町の家のリフォーム、再生」(2019)／「脚折町の家のリフォーム、再生」(2019) など

三宅 紀子 教授

専門分野 食品栄養学、調理科学
担当科目 家政学総合特論、食生活学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「調理・加工による抗酸化成分の変化、食品の嗜好性に関する研究」超高齢社会を迎えて、健康維持や生活習慣病の予防に重要な役割を果たす野菜や果物の積極的な摂取をめざして、野菜や果物の調理・加工におけるビタミン C をはじめとした抗酸化成分の変化についての研究に取り組んでいます。また、食の機能のひとつである嗜好性について、官能評価に加えて、呈味成分の分析などを組み合わせて解析をしています。

研究業績 「市販長崎カステラの嗜好性」(日本調理科学会誌, 44, 286-290 頁, 2011)／「ビタミン・ミネラルの科学」(朝倉書店, 2011)／「食物学概論 第2版」(光生館, 2017)／「精白米の炊飯におけるアクリルアミドの生成」(日本調理科学会, 2017)／「ピクルスのビタミン C」(日本家政学会, 2018)／「調理実習履修前後の学生の調理に関する意識の比較」(日本調理科学会, 2019) など

吉永 早苗 教授

専門分野 子ども学、音楽教育
担当科目 子ども学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「子どもの音感とその表現」「保育者養成教育(保育内容：表現)」生活やあそびの中での子どもの素朴な表現、身の回りのモノと関わりながら身体の諸感覚で音を感じる姿をとらえ、その中で子どもはどのように思考をめぐらせ、音楽表現がどのように表出していくのか、保育者がどのように関わることで子どもの主体的な表現の質を高めていくことができるのか、といった内容をおもなテーマとして調査研究しています。

研究業績 「大学生による『一週間の音日記』－保育・小学校教諭を目指す学生の「聴くこと」に対する意識を高める試み－」(音楽学習研究 8, 23-34 頁, 2012)／「育児における「語りかけ」「歌いかけ」大切さ－養育者・保育者と幼児児間の音声相互作用の視点から－」(思春期青年期精神医学 21(2), 110～124 頁, 2012)／「子どもの音感受の世界」(朗文書林, 2016)／「保育内容 表現」(ミネルヴァ書房, 2019) など

研究指導補助教員

石綱 史子 准教授

専門分野 園芸学(ガーデニング)
担当科目 家政学特別研究演習

研究テーマ 「ハスの研究」ハスの地下茎、花、葉などの形態と関連遺伝子の研究と花芽形成や花の開閉に関する研究に取り組んでいます。

研究業績 Flower bud formation of sacred lotus (*Nelumbo nucifera* Gaertn.) : A case study of 'Gyozankouren' grown in a container. Hort-Science, 49:516-518. 2014. ／「ハス」(日本緑化工学会誌 35(2), 374 頁, 2009) など

研究指導補助教員

井上 清美 准教授

専門分野 家族社会学

担当科目 生活経営学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「家族の変化にともなうケアの社会化」専業主婦の割合が減少する中で、子育ての外部化や子育て支援の制度化がどのように進行しているのかを研究してきました。現在は、フィンランドでの調査をもとにした保育労働と介護労働の比較研究や、保育者を中心とした多職種連携協働の実証研究に取り組んでいます。

研究業績 「現代日本の母親規範と自己アイデンティティ」(風間書房, 2013)／「地域子育て支援を労働として考える ―子育てでひろば・一時保育を支える人々」(勁草書房, 2020)／「改訂 新しい家族関係学」(建帛社, 2018)／「子育て支援における保育者を中心とした多職種協働モデルの開発」(科研費基盤研究C 代表者 2021-2023)／「保育労働と介護労働の比較研究 ―ケア共通資格を中心に」(科研費若手研究 代表者 2018-2020) など

上 蘭 薫 准教授

専門分野 食品科学、食品衛生学

担当科目 食品科学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「食用花の機能性探索・伝統食品加工手法の応用・有用微生物の単離活用など」昔より食されている食用花以外に新規栽培され始めている食用花における彩り以外の付加価値探索や火山灰を使用した灰干しという伝統加工手法を魚介類だけでなく、様々な食材へ応用活用検討を行っています。また、地域特性の付加価値付与を目的に有用微生物の単離と安全性を確認のうえ、その微生物の加工食品への応用研究にも取り組んでいます。

研究業績 「異なる製パン法がアピオスのイソフラボン組成に及ぼす影響」(日本食品科学工学会誌, 64巻11号, 542-548頁, 2019)／「わかりやすい食品機能学第2版」(三共出版, 2017)／「火山灰干し野菜の加工食品への検討」(日本食品保蔵科学会第68回大会, 2019)／「キャンパス内野草からの野生酵母採取と応用検討」(日本調理科学学会平成27年度大会, 2015) など

黒田 久夫 准教授

専門分野 食品機能学

担当科目 食品機能学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「食品の酵素と品質」植物性食品に含まれる酵素がどのように食品の品質に影響を与えるかを、生化学の手法で解析しています。「おいしさの化学感覚」ヒトの嗅覚、味覚や心理とおいしさの関係を研究しています。「分子栄養学」分子栄養学は、分子生物学と栄養学を組み合わせた新しい学問です。ヒトの遺伝型と栄養の関係を明らかにしていきます。

研究業績 Identification and functional analyses of two cDNAs that encode fatty acid 9-/13-hydroperoxide lyase (CYP74C) in rice, Biosci. Biotechnol. Biochem. 69:1545-1554, 2005. ／「オオムギの脂質酸化酵素とビールの品質」(温古知新 49:83-90頁, 2012)／「大豆の加工時におけるリポキシゲナーゼの脂肪酸含量への影響」(日本家政学会第72回大会, 2020) など

丹羽 さがの 准教授

専門分野 発達心理学

担当科目 発達支援特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「幼児期から児童期の学び・育ちについて」幼稚園・保育所・子ども園での幼児期の学びから、小学校での児童期の学びへつなげていく接続期のあり方に関心があります。幼児期の学びや育ちを土台として、児童期の学びを展開していく方法を、さまざまな視点から考えたいと思っています。

研究業績 「保育の心理学―子どもの育ち・学びを知る―」(光生館, 2019)／「子どもの理解と援助―育ち・学びをとらえて支える―」(光生館, 2019)／「育ちと学びをつなぐ幼小接続(2)―幼小接続に関するキーワードの既知と研修の参加回数に関する調査―」(平成30年度保育教諭養成課程研究会研究大会, 2018) など

小野 由美子 准教授

専門分野 消費者教育、消費生活論

担当科目 消費者教育特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「支援の必要な人のための消費者教育について」消費者は多様であり、主体的に生きるために求められる消費者教育の学習目標も様々ではありません。近年、消費者の持つ特性による違いに考慮した消費者教育や施策が注目されています。未成年者や高齢者、障害のある消費者について、特別支援学校や高等学校などを対象にした調査を実施する形で、それぞれの立場に配慮した消費者教育のあり方について研究しています。

研究業績 小野由美子・上杉めぐみ「キャッシュレス決済の推進に伴う消費者教育のあり方について―韓国消費者院へのヒアリングおよび日本の高校生への意識調査などの分析を通して―」(日本消費者教育学会『消費者教育』, 第40冊, 13-23頁, 2020)／小野由美子・川崎孝明「全国の特別支援学校における金銭管理教育と社会資源の活用について」(国民生活センター「国民生活研究」, 第58巻第1号, 44-65頁, 2018) など

木村 文香 准教授

専門分野 学校心理学、臨床心理学、社会心理学

担当科目 教育心理学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 良好なグループダイナミクス形成のためのプログラム開発の研究に取り組んでいます。良好なグループダイナミクス(集団力動)は、グループ、グループ成員双方の特性に良い効果をもたらします。このようなグループの持つ力を個人や生活に用い、より良い暮らしにつなげる方法を実践的に研究しています。特に発達障害者を含む、インクルーシブな集団に適用できるプログラム開発をめざしています。

研究業績 「大学生を対象とした宿泊型健康教育の試み―野外レクリエーションを用いたグループワークプログラムのもたらす効果―」(江戸川大学紀要「情報と社会」, 26, 381-396頁, 2016)／「歩行開始期の子をもつ親と祖父母のガイドデータの分析：育児支援頻度および回答不一致の要因」(発達心理学研究 28<1>, 35-45頁, 2017) など

竹中 真紀子 准教授

専門分野 食品科学

担当科目 食生活学特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「食品の調理・加工による品質変動とその評価」食品の調理・加工によって、機能性成分などの有用成分がどれくらい失われるのか、また、天然毒素や有害加熱生成物などの有害成分をどれくらい低減できるのか(生成量を抑制できるのか)、そしてそれらの観点から有用な調理・加工方法が喫食する側および調理する側から受け入れられるのかといったことについて研究しています。

研究業績 「玄米の炊飯におけるアクリルアミドの生成」(日本調理科学会平成29年度大会, 2017)／Reduction of pyrrolizidine alkaloids by cooking pre-treatment of the petioles and the young spikes of *Petasites japonicus* : Food Sci. Technol. Res., 28, 245-255, 2022 など

柳瀬 洋美 准教授

専門分野 臨床心理学、発達臨床心理学、児童学、保育学

担当科目 発達支援特論、家政学特別研究演習



研究テーマ 「子育て支援」児童虐待に象徴されるように、社会の変容と共に、子どもたちを取り巻く環境は複雑で厳しいものとなっています。こうした社会的背景を踏まえながら、個々の生い立ちや発達の課題にも焦点を当て、目の前の相手に寄り添い支援するという実践活動をベースに、主に子どもと家族をめぐる諸問題について、臨床心理学的な視点から研究を行っています。

研究業績 「気になる保護者の理解のために「内なる子ども」との対話を通して」(ジアース教育新社, 2022)／「社会的子育ての実現―一人となつたり社会をつなぐ保育カウンセリングと保育ソーシャルワーク」(ナカニシヤ出版, 2022)／「発達障害の理解と指導」(大学図書出版, 2018)／「人間関係の理解と臨床―家庭、園、施設、学校、職場の問題解決へ向けて」(慶應義塾大学出版会, 2017) など

授業紹介

生活経営学特論

担当 井上 清美 准教授

孤独や孤立が深刻化する中で、地域コミュニティの重要性や実現可能性について認識と理解を深めます。2回の学外演習を通してコミュニティ共創の実践を学び、地域プロデューサーの資格を取得します。地域における生活向上のために何が必要か、それぞれの立場から提案できるようになることが目標です。

食生活学特論

担当 三宅 紀子教授 竹中 真紀子准教授

食生活について、健康との関わり、調理・加工による変化、嗜好性など科学的側面から、最新の知見も取り入れて講義します。また、食の機能性など、食に関する正しい情報の収集する方法についても解説します。

子ども学特論

担当 新開 よしみ教授 吉永 早苗 教授

子ども学分野の文献を講読し、子どもを取り巻くさまざまな現代的課題を理解するとともに、最新の研究動向について検討。受講生の発表を中心とした授業のほか、保育実践の場における観察調査も実施します。

服飾文化特論

担当 山村 明子教授

19世紀後半のイギリス・ヴィクトリア朝の社会における女性の位置づけを理解し、当時の女性服飾が包含していた意味を学びます。同時代に西欧文化を積極的に導入した日本では、洋服がどのような存在かも考えます。

住環境計画特論

担当 小池 孝子教授 原口 秀昭 教授

住環境を計画する際、生活の質を向上させるため解決すべき課題を検討。前半は「住宅地のフィールドワークを通して地域における課題」を、後半は「自宅、建築家の住宅などの図面を3つ選定し生活における計画上の課題」を抽出し、改善案を提案します。

教育学特論

担当 河田 敦子教授

近代公教育制度の成立過程を国際的に比較しながら、公教育とは何かを歴史的に考察。「公教育」の多様性を学び、教員として、今後の日本の公教育のあり方を国際的、多面的かつ自身に引きつけて考えられるようになることを目標とします。

家政学専攻 修了後の進路

- 地域社会に貢献する公務員
- 次世代の生きる力を育てる中学校・高等学校家庭科教諭
- 公共団体などにおける消費生活のアドバイザー
- 企業などにおける生活者の視点を活かした専門的スタッフ

家政学専攻 取得できる資格

- 中学校教諭専修免許状(家庭)
- 高等学校教諭専修免許状(家庭)

■ 家政学専攻 過去の修士論文題目の例

- ☐ 花嫁かつらの伝承に関する研究 ―現状分析と着装感の解明と提案―
- ☐ 中国における今後の高齢者支援を踏まえたソーシャルネットワークの実際に関する研究 ―日本との比較を踏まえて―
- ☐ 国際結婚をした中国人女性農業者のエンパワメントプロセス
- ☐ 親子分離不安と関係性の発展
- ☐ 戦後日本の狭小住宅における平面計画に関する研究
- ☐ 一幼児の集団活動における親子関係の変化―
- ☐ 19世紀ヨーロッパの女性服飾にみる黒いチョーカーについての言説

授業科目一覧

科目区分		授業科目	単位数
導入科目		家政学総合特論	2
専門領域科目	家庭経営学	生活経営学特論	2
		消費者教育特論	2
		服飾文化特論	2
	被服学	衣環境学特論	2
		食生活学特論	2
	食物学	食品科学特論	2
		食品機能学特論	2
		住環境計画特論	2
	住居学	住環境設計特論	2
		環境文化特論	2
		建築構法特論	2

科目区分		授業科目	単位数
専門領域科目	子ども学	子ども学特論	2
		発達支援特論	2
	福祉学	高齢者福祉特論	2
		地域福祉活動特論	2
	教育学	教育学特論	2
		教育実践特論	2
研究指導科目		教育心理学特論	2
		家政学特別研究演習 1	2
		家政学特別研究演習 2	2
		家政学特別研究演習 3	2
		家政学特別研究演習 4	2

1. 修了要件	(1) 学則第12条の3に基づき、30単位以上を修得すること。 (2) 修士論文または特定の課題についての研究の成果の審査および最終試験に合格すること。	2. 履修要件	(1) 必修10単位「家政学総合特論」「家政学特別研究演習1～4」 (2) 選択20単位以上
---------	---	---------	---

人間生活学研究科 栄養学専攻

Master's program in nutrition sciences

栄養学は、さまざまなライフステージおよび健康状態にある人々の栄養の営みを対象とし、ヒトに関わる領域、食品に関わる領域、さらにはそれらの関係性や実践に関わる領域をも含む、総合的で複合的な学問です。

栄養学専攻は、栄養学を食品科学、健康科学、臨床栄養学、実践栄養学の各領域に体系化し、それぞれの専門的知識と技術を総合的に修得できるのが特徴です。

教育研究領域のイメージ



授与学位

修士(栄養学)

入学定員

4名

開講キャンパス

千代田三番町キャンパス

栄養学専攻 3つのポリシー

アドミッション・ポリシー

これまでに培った栄養学の学識や能力を基盤に、学術の理論及び応用の深奥を究めようとする好奇心の強い人、また、多様な経歴や高い倫理観をもった人を幅広く求めている。

【知識・技能】 食品に関わる領域、健康に関わる領域、そして、その関係性や実践に関わる領域を広く学び、高度な知識・技能を身につけたい人。

【思考・判断】 食と栄養を中心に、人を取りまく環境に係わる今日的な健康問題を把握し、これを解決する方法について、科学的根拠に基づき探究したい人。

【関心・意欲・態度】 学術の急速な進歩と社会構造の変化に関心を持ち、健康の維持・増進並びに疾病の予防に貢献したい人。

【表現】 他者を理解した上で、自らの見解を形成し、それを豊かに表現する能力を培いたい人。

カリキュラム・ポリシー

栄養学の幅広い研究領域の視野を得て、その中で自身の研究課題を位置づけ、研究の実施が可能となるよう、系統的な学びのカリキュラムを編成する。

- 個別の研究課題に取り組む前に、栄養学の学際性・多様性に触れる目的で、入学時に全専任教員による「栄養学総合特論」を開講する。
- 多様な知見を深める目的で、食品科学、健康科学、臨床栄養学、実践栄養学の領域における特論科目群を開講する。
- 研究を進めるための方法論の修得を目的として、「食品・栄養英語文献抄読演習」を開講する。
- 修士論文の作成に向け、複数の教員による指導を受けることができ、多領域の教員からも助言を得ることができる「栄養学特別研究演習」を開講する。

ディプロマ・ポリシー

所定の単位を修得し、以下の学識・能力を身につけ、かつ修士論文についての研究成果の審査および最終試験に合格した者に修士(栄養学)の学位を授与する。

【知識・技能】 栄養学に関する高度な知識・技能を修得し、それらを総合的に活用することができる。

【思考・判断】 科学的な視点で人と栄養・食に関する様々な問題を捉え、優れた思考力・判断力を持って解決法を導き出すことができる。

【関心・意欲・態度】 主体性を持って学び続ける意欲を持ち、食品、保健、医療、食育などの分野で中核として活躍できる能力を有している。

【表現】 適切な栄養管理を実践できるコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を有し、高い倫理観を持って思考・判断のプロセスや結果を他者と共有し、解決策を提言できる。

柔軟なカリキュラムと実践的な指導で 食・健康分野をリードするスペシャリストを育成

「栄養」とはもっとも基本的で欠かすことができない人間の営みです。だからこそ、さまざまなライフステージおよび健康状態にある人々にとっての課題を見だし、そしてその課題を解決に導く栄養学のスペシャリストの存在が重要となります。本専攻は、食・健康分野をリードするスペシャリストが必要とされる基礎から応用まで、柔軟性を持ったカリキュラムと実践的な研究でサポートします。食品科学、健康科学、臨床栄養学、実践栄養学の各領域において専門性を持った教授陣により、個々の大学院生のニーズにこたえることができるような指導体制を整えています。人々の健康と豊かな生活の実現に向けて、高度な専門知識・技術の修得をめざす皆さんの入学をお待ちしています。

栄養学専攻主任
海野 知紀 教授

専任教員 研究指導教員

海野 知紀 教授

専門分野 食品科学(食品機能、食品分析、ポリフェノール学)
担当科目 栄養学総合特論、食品機能学特論



研究テーマ 「食品成分が腸内フローラとその代謝物の産生に及ぼす影響」
我々の大腸には多種・多様な腸内細菌が生息しており、そのバランスが健康維持に重要です。腸内フローラは私たちの食生活によって良くも悪くもなることから、どのような食品成分が腸内フローラに影響を及ぼすかについて研究しています。特に、肥満や腎臓病の予防の観点から、腸内細菌が合成する代謝物が生体への影響を中心に研究に取り組んでいます。

研究業績 Consumption of young barley leaf extract increases fecal short-chain fatty acid levels: a before-after clinical trial: Food Research 4, 1151-1155 (2020). / Green tea extract and black tea extract differentially influence cecal levels of short-chain fatty acids in rats: Food Science and Nutrition, 6, 728-735 (2018). など

江川 賢一 教授

専門分野 健康・スポーツ科学(スポーツ生理学、ヘルスプロモーション)
担当科目 栄養学総合特論、運動生態学特論



研究テーマ 「スポーツ・健康づくりのアドボカシーの生態学的研究」ジュニアサッカー合宿、大学生アスリートを対象としたスポーツ栄養学研究や、公衆衛生学、健康教育学、スポーツ科学に基づく調査や実験を実施しています。健康な社会参加へのアクセシビリティとしての公共交通機関の社会実装を目的とした多施設共同によるアドボカシー研究に参画し、人間の運動行動と環境との関係を解明する「運動生態学研究」に取り組んでいます。

研究業績 「新型コロナウイルス感染症蔓延による都道府県民健康・栄養調査への影響」(日本公衆衛生雑誌, 69(8), 586-594 頁, 2022) / 「スポーツがもたらすメリット 運動と発育」(臨床スポーツ医学, 37(5), 526-530 頁, 2020) / 「第23回IUHPE世界大会における非感染性疾患対策の研究動向」(日本健康教育学会誌, 27(4), 387-391 頁, 2019) など

金澤 良枝 教授

専門分野 食生活学(臨床栄養学、腎臓・代謝疾患食事療法)
担当科目 栄養学総合特論、臨床栄養学特論



研究テーマ 「慢性腎臓病、糖尿病性腎症の栄養評価・食事療法管理に関する研究」慢性腎不全・保存療法期の低たんぱく食事療法の透析導入遅延効果、低たんぱく食の栄養学・食品学的評価、実際に実行している患者の栄養評価など臨床データと合わせて臨床現場で研究していきます。さらに血液透析患者の身体計測などを含めた栄養評価と、食事療法についても臨床現場で研究を行います。

研究業績 「血液透析患者のサルコペニア評価における Ishii score の有用性」(透析会誌 56, 283 ~ 289, 2021) / 「透析患者における食事マグネシウム補給についてー食品常用量当たり含有量およびモデル献立からの検討ー」(透析会誌, 53, 147-153 頁, 2020) / 「心もカラダもすっきり! 不調しらず! 食べ方レッスン BOOK」(ナツメ社, 2019) など

斉藤 恵美子 教授

専門分野 食生活学(小児科学、応用栄養学、臨床栄養学)
担当科目 栄養学総合特論、病態生理学特論

研究テーマ 「生活環境・習慣と疾患」おもに小児における生活環境や習慣と各種疾患(特に生活習慣病やアレルギー疾患)との関連の研究に取り組んでいます。

研究業績 「小児の体格と親子の食習慣の関連について」(日本小児保健学会, 2019) / 「新生児血中特異的 IgE 抗体と乳児期の感作およびアレルギー疾患発症に関する検討」(日本小児アレルギー学会, 2017) / 「小児期 non-HDL-C の縦断変化と成長に伴う体格変化の関連性」(日本肥満学会, 2015) など

酒井 治子 教授

専門分野 地域栄養教育学(食育、食発達)
担当科目 栄養学総合特論、地域栄養教育特論



研究テーマ 「幼児の食行動の発達過程の解明と、それに対応した食育の実施・評価」地域でのさまざまな栄養活動の実践を通して、その栄養教育の計画・実施・評価の具体的な展開についての課題解決の方法について研究しています。特に、ライフステージとしては、乳幼児から学童期の子どもの対象に、その発達過程を解明しつつ、家庭や保育所での食育実践から、理論を構築する方法を探索していきましょう。

研究業績 幼児は保育所でのような「さかなを使った食事」を食べる可能性があるかーK 雑誌に掲載された24か月分の献立分析からー, 東京家政学院大学紀要 (61): 47-59, 2021 子どもとともに育ちあう「食を営む力」, 子ども学, 9, 152-177, 2021 低年齢児の食事場面で保育者の援助と環境構成に関する研究, 保育科学研究 9: 46-66, 2021 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究(1)学生版 KUG(帰宅困難者支援施設運営ゲーム)の開発, 令和3年度「千代田学」に関する区内大学などの事業提案制度事業実施報告書, 令和4年3月

田中 千晶 教授

専門分野 応用健康科学、発育発達学
担当科目 ヘルスプロモーション特論



研究テーマ 「健康に資する身体活動促進と体力向上のための生活習慣・環境改善」子どもから高齢者までの幅広い年齢層における健康の保持増進のため、生活習慣および環境の改善に資する研究や、アーティスティックスイミング元日本代表の経験を活かしたスポーツ参加促進について研究しています。また、経済状況の異なる複数の国が参画する国際共同研究に取り組んでいます。

研究業績 Longitudinal changes in objectively measured sedentary behavior and their relationship with adiposity in children and adolescents: systematic review and evidence appraisal. Obes Rev. 15, 791-803 (2014) / Association between 24-hour movement guidelines and physical fitness in children. Pediatr Int. 62, 1381-1387 (2020) / 「基礎から学ぶ発育発達のための身体活動～元気な子どもを育む確かな根拠～」(2019, 杏林書院) など

田中 弘之 教授

専門分野 栄養政策学
(公衆栄養学、栄養調査、食品表示)
担当科目 栄養学総合特論、公衆栄養学特論



研究テーマ 「栄養政策における公衆栄養活動に関する研究」持続可能な社会の実現のために日本の栄養政策は、食事、人材養成と科学的なエビデンスに基づく政策プロセスが展開されています。その担い手となる具体的な展開についての課題解決の方法について研究しています。

研究業績 「特定健康診査・特定保健指導」(公衆栄養学, 南江堂, 96-103 頁, 2019) / 「少子・高齢社会の現状と栄養・健康政策」[日本人の食摂取基準](公衆栄養学概論, 同文書院, 26-40・163-199 頁, 2019) / 「栄養指導の概念」(栄養指導論, 同文書院, 3-12 頁, 2019) / 「日本の栄養状態を俯瞰する」(ニューダイエットセラピー vol35No.1, 37-39 頁, 2019) など

林 一也 教授

専門分野 農芸化学(応用微生物学、食品科学、食品加工学、食品衛生学)
担当科目 栄養学総合特論、食品学特論

研究テーマ 「食品の成分に関する研究」食品にはさまざまな成分が含まれます。その中でもアントシアニンを代表とする色素成分の探求や食品加工による変化、それらの生理機能性などを研究しています。さらに、微生物や酵素に関する研究、食酢などの伝統食品に関する研究にも取り組んでいます。

研究業績 Anthocyanins from skins and flesh of potato varieties, Food Science and Technology Research, Vol.1, No.2, pp.115 ~ 122, 2010 / 「アントシアニンと食品」(建帛社, 2015) / 「ワインビネガーの明治時代から昭和におけるまでの活用発展と展開」(日本調理科学会 2019 年度大会, 2019) など

研究指導補助教員

大富 あき子 准教授

専門分野 食生活学(調理、食育、食文化)
担当科目 栄養学総合特論、調理学特論

研究テーマ 「低利用・未利用の深海性魚介類の食材開発と食教育への導入」世界的に魚介類の消費量が増加している中で、逆に水産大国の日本では減少し肉類に嗜好が傾いています。また食教育の現場では地産地消が見直されていますが魚介類の認知度は低く、食教材としての関心や問題意識は農畜産物と比較し低いといえます。そこで漁獲されても海上投棄されてしまう未利用魚の食材および食教育への活用を検討しています。

研究業績 「鹿児島県の学校給食における郷土料理および地場産物の活用(1)活用の現状と問題」(鹿児島純心女子短期大学研究紀要 第47号, 27-38頁, 2017)／「こぼさき」(別冊うかたま)伝え継ぐ日本の家庭料理<一般社団法人農山漁村文化協会>第14巻, 93頁, 2019)／「鹿児島湾における未利用・低利用甲殻類資源の分布と食味」(日本調理科学会大会, 2019) など

加藤 理津子 准教授

専門分野 実践応用栄養学(応用栄養学、スポーツ栄養)
担当科目 栄養学総合特論、スポーツ栄養管理学特論

研究テーマ 「スポーツ実施者および健康人を対象にした栄養管理に関する研究」スポーツに取り組んでいる人は、競技力向上や健康づくりを目的とした栄養・食事の内容や摂取方法に関心が高い傾向にあります。そこで、スポーツ実施者や健康者を対象に、身体および栄養・食事摂取状況の実態と、栄養・食事に関する情報のニーズを調査しています。その結果から効果的な栄養教育の内容、方法、媒体の開発について研究に取り組んでいます。

研究業績 「運動部女子中高生における生活習慣状況調査」第9回日本食育学会学術大会2021／「運動と発育」(臨床スポーツ医学 37巻5号, 2020)／「改訂応用栄養学実習書-PDCAサイクルによる栄養ケア」(学文社, 2020)／「食物と栄養学基礎シリーズ8新応用栄養学」(建帛社, 2020) など

辻 雅子 准教授

専門分野 栄養教育(健康と食生活、食教育、生活習慣病予防、食情報)
担当科目 栄養学総合特論、栄養教育特論

研究テーマ 「人の食行動変容に対し栄養教育の手法が及ぼす効果について」栄養教育の実践には栄養学、食品学、教育学、心理学、社会学、食文化など、さまざまな幅広い学問分野から総合的に研究を行うことが必要です。人の食行動変容を促すための、食教育や食環境などのさまざまな側面から、栄養教育学的手法を用いた研究や、栄養教育実施者にとって必要な栄養教育教材についての研究にも取り組んでいます。

研究業績 「栄養教育論演習[第2版]」(建帛社, 2015.04)／「栄養教育論 第2版」(光生館, 2020.03)／「小学校の授業における栄養教諭の関わりについて―大豆の加工品である『おから』を活用した栄養教育―」(第65回日本栄養改善学会学術総会, 2018.09)／「調理食品の鉄含有量の実測方法と計算法との栄養教育面からの比較研究」(第73回日本栄養・食糧学会大会, 2019.05) など

吉野 知子 准教授

専門分野 給食経営管理(高齢者栄養管理、在宅チーム医療)
担当科目 栄養学総合特論、栄養管理学特論

研究テーマ 「高齢者の栄養ケア・マネジメントと栄養評価」高齢者の低栄養はさまざまな身体・精神機能の低下と関連しており、栄養ケア・マネジメントによって低栄養改善を図る際には単にエネルギー・栄養素の補給を目的とするのではなく、食べることに関連する種々の徴候・症状を的確に把握し、安定した食事摂取状況を確保するために食環境を含め適切に問題解決に努めることが、QOLの向上や予後の改善につながります。

研究業績 「在宅高齢者食事ケアガイド」(第一出版株式会社, 2014)／「施設の栄養ケアにおける多職種連携―ビデオ内視鏡導入による摂食・嚥下機能評価の取り組み―」(日本健康医学会, 2010)／「介護保険施設入所者に対する栄養・口腔関連の介護報酬算定の取り組み」(日本給食経営管理学会, 2014) など

授業紹介

食品学特論

担当 林 一也 教授

食品のさまざまな事項、伝統食品の加工など食の歴史を含めたものを学び、食とは何かを考えます。多様な食品群の生産、栽培を含め本質を知ることで、人間にとって欠かせない「食物」を違う角度から見るができます。

食品機能学特論

担当 海野 知紀 教授

生命を維持する栄養素、健康増進のための食品成分の機能について、最近のトピックスを含めて解説するとともに、実際の商品開発への展開、消費者レベルでの摂取上の問題点と関連させながら講義します。

調理学特論

担当 大富 あき子 准教授

調理による栄養素の消長や機能成分の変化、物性の変化と食べ易さとの関連、食文化や歴史など、管理栄養士に必要な内容を学びます。具体的には、会席料理の献立構成についての調査、調理をし、一般的な給食献立との比較検討を行います。

運動生態学特論

担当 江川 賢一 教授

健康寿命の延伸、非感染性疾患の予防および管理、人口減少社会の持続可能性の維持といった現代社会の課題を解決するうえで、人間の生活行動である食や運動行動と環境との関連を実証する研究方法を教授します。

ヘルスプロモーション特論

担当 田中 千晶 教授

日本を含む様々な経済状態の国々が参画する国際共同研究などを通して、国内外の体型評価の違いやスポーツをはじめとする身体活動量および座位行動の評価法など、ヘルスプロモーションに関連する最新の研究手法や、生活環境などとの関連といった国内外の健康課題を学修します。

地域栄養教育特論

担当 酒井 治子 教授

地域ベースでの栄養教育の実践のために、地域で暮らす人々のニーズアセスメントの手法を身につけます。社会資源との連携、科学的根拠に基づいた計画・実施、個人・環境アプローチの組み合わせなど、具体的な方法と理論を学びます。

栄養学専攻
修了後の進路

- 医療・介護に関わる高度な栄養管理を実践する専門分野の管理栄養士
- 行政分野で取り扱う栄養問題の改善・解決にリーダーシップを発揮する行政栄養士
- スポーツ、健康増進、学校などの現場で、対象者の目的に応じた高度な栄養管理を実践するスペシャリスト
- 食品企業などで栄養面、安全面、経済面を踏まえた商品を研究・開発するスペシャリスト

栄養学専攻
取得できる資格

- 栄養教諭専修免許状

■ 栄養学専攻 過去の修士論文題目の例

- ☐ 簡易型自記式食事歴法質問票 (BDHQ) で評価した肥満小児の栄養摂取状況と喫食速度の関係
- ☐ アントシアニン含有馬鈴しょの調理・加工に関する研究
- ☐ 大麦若葉搾汁成分のラット腸内細菌叢への影響
- ☐ 古代米発酵赤酢に関する研究
- ☐ ワインと魚介類の相性に関する研究
- ☐ 保育園児の保護者と保育者の「子どもの食を支える力」に関する質的研究

授業科目一覧

科目区分		授業科目	単位数
専門領域 科目	食品科学	栄養学総合特論	2
		食品学特論	2
		食品機能学特論	2
		調理学特論	2
	健康科学	ヘルスプロモーション特論	2
		運動生態学特論	2
		スポーツ栄養管理学特論	2
	臨床栄養学	病態生理学特論	2
		臨床栄養学特論	2
		小児臨床栄養学特論	2

科目区分		授業科目	単位数
専門領域 科目	実践栄養学	栄養教育特論	2
		地域栄養教育特論	2
		公衆栄養学特論	2
		栄養管理学特論	2
	共通	食品・栄養英語文献抄読演習	1
研究指導科目		栄養学特別研究演習 1	2
		栄養学特別研究演習 2	2
		栄養学特別研究演習 3	2
		栄養学特別研究演習 4	2

1. 修了要件

- (1) 学則第12条の3に基づき、30単位以上を修得すること。
- (2) 修士論文の審査および最終試験に合格すること。

2. 履修要件

- (1) 必修10単位「栄養学総合特論」「栄養学特別研究演習1～4」
- (2) 選択20単位以上

各種支援制度

人間生活学研究科独自の修学・研究活動を支える多彩な制度を備えています。働きながら修士課程の取得をめざす方や、学部からのステップアップをめざす方の学びをバックアップします。



修学支援制度

■ 特待生制度

入学試験の総合得点最上位者を特待生として認定する制度です。特待生は、1年次授業料の半額(前期分15万円、後期分15万円)が免除されます。各入試日程において各専攻から1名を特待生として認定します。

※ただし、基準点に満たない場合は特待生の対象とはなりません。

■ 長期履修学生制度

職業についている場合など、長期にわたり計画的に教育課程を履修することを認める制度です。新入生、1年次生時に申請することで、最大4年間まで認められます。授業料・施設設備資金は修業年限分の総額を長期履修期間の年数で割った金額となります。

■ 秋期(9月)入学制度

4月入学に加えて9月に入学することができる制度です。入学時期を選択できるため、社会人や留学生が履修時期を調整しやすい環境が整っています。

■ 在学期間短縮制度

大学院の在学期間を短縮することができる制度です。本大学院入学前に、本大学院または他の大学院において修得した単位がある場合は、下記の要件を満たし、既修得単位の認定申請を行うことで、在学期間を短縮することができます。

専攻	短縮できる在学期間	要件
家政学専攻	半年	本大学院で開講している家政学特別研究演習1(2単位)を含み、かつ合計8単位以上について本大学院の教育課程の一部を履修したと認められること。
	1年	本大学院で開講している家政学特別研究演習1・2(各2単位)を含み、かつ合計15単位以上について本大学院の教育課程の一部を履修したと認められること。
栄養学専攻	半年	本大学院で開講している栄養学特別研究演習1(2単位)を含み、かつ合計8単位以上について本大学院の教育課程の一部を履修したと認められること。
	1年	本大学院で開講している栄養学特別研究演習1・2(各2単位)を含み、かつ合計15単位以上について本大学院の教育課程の一部を履修したと認められること。

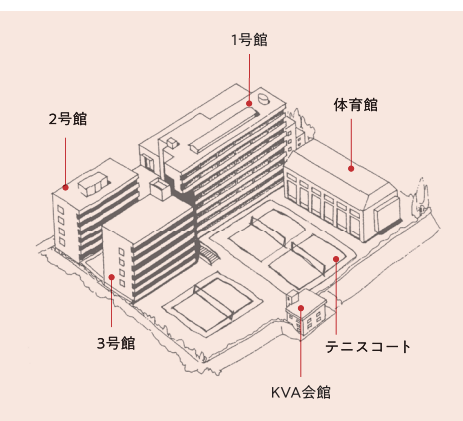
研究支援制度

■ 学会発表・参加助成制度

大学院生が学会に発表・参加することを奨励しており、国内で開催される学会に発表・参加するための交通費・参加費を助成しています。学会にて研究成果を発表し、さまざまな意見を聞くことで自身の専門性を磨くことにもつながります。

■ ティーチング・アシスタント制度

本大学院では、授業担当教員の指導のもと、学部の授業(実験、実習、演習など)の教育補助を行う「ティーチング・アシスタント(T・A)」制度があります。T・Aは大学の公的な業務であり、教育補助業務を担当することで、教育能力やコミュニケーション能力を高めることができ、さらに手当の支給も受けられます。



CHIYODA SANBANCHO Campus

千代田三番町キャンパス | ■家政学専攻 | ■栄養学専攻

鉄道6路線を利用できるなど、抜群のアクセスを誇る都心のキャンパスです。白を基調とした明るい雰囲気の内装が中心で、各種教室をはじめ、本格的な設備が整った実習室、開放的な憩いのスペースといった、学生生活に必要な環境が整っています。



ローズホール

円形の天井が特徴の多目的ホール。ランチタイムには、食堂として学食を提供したり、お弁当を持ち寄ったりとにぎやか。ステージを出して式典や講演会に利用されることもあります。



ロビー

吹き抜けになっている明るい雰囲気のロビー。正門からすぐの場所にあります。



大学院研究室

パソコンが備えられた大学院生専用の研究室。院生それぞれに机が設けられ、院生同士の情報交換の場にもなっています。



ラウンジ

食事や自習以外にも多目的に利用できるラウンジ。



附属図書館

情報検索や蔵書検索に利用できるコンピュータを設置。マルチメディアルームでは、館内のDVDで好きな映画を楽しめます。



グループスタディールーム

図書館内に2室あり、ゼミの討論やパソコンを持ち込んでいるグループ学習などに使用できます。



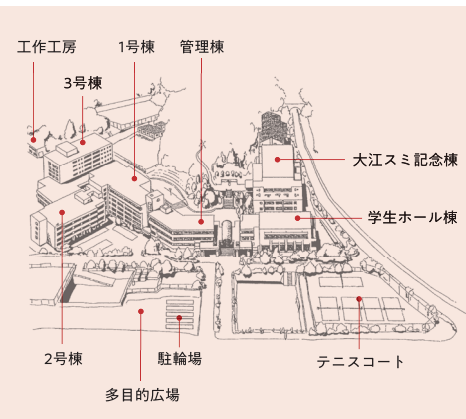
パウダールーム

白を基調としたかわいいデザイン。いつも清潔にされており、使い心地抜群です。



キャリア形成支援・就職資料室

ネットを利用した独自の就職支援システムや、先輩の就活の記録などをご用意。



MACHIDA Campus

町田キャンパス | ■家政学専攻

約138,000㎡の広大な敷地を持つ町田キャンパス。春には桜並木、秋には紅葉など、四季の自然を楽しめる環境です。実習施設や図書館、学食、テニスコートなど、キャンパスライフに必要な設備が充実しているのはもちろん、本格的なホールや博物館も敷地内にあります。



ローズコート

白を基調とした空間に、モダンな照明、ピンクのソファ、雲の形をしたテーブルなど、遊び心のあるインテリアが魅力。憩いの場としてはもちろん、演習発表や学内企業説明会などの会場としても使われます。



生活文化博物館

古今東西の衣服・装身具・工芸品、民俗資料や歴史的遺物を保管・展示しています。



大学院研究室

パソコンが備えられた大学院生専用の研究室。院生それぞれに机が設けられ、在学中は自由に使用することができます。



KVA shop (コンビニ)

かわいい外観のコンビニエンスストア。キャンパスライフで必須のアイテムを購入できます。



大江スミ記念ホール

1,400名を収容できる大ホールです。入学式や卒業式といったセレモニーをはじめ、さまざまな講演会などが行われます。



食堂

和・洋・中のメニューから期間限定のご当地グルメまで、バラエティ豊かな食事をご用意。午後からはカフェとして、ゆったりした時間を過ごせます。



附属図書館

書籍約260,000冊、雑誌約1,900種、視聴覚資料約7,000点を所蔵。電子書籍の導入を始めたほか、館内のラーニングコモンズではグループ学習も行えるなど、それぞれのスタイルで利用できる環境です。

